「啓発する，関わる，可能にする，つなげる」図書館大会 -IFLAダブリン大会-

メタデータ	言語:
	出版者: 日本図書館協会
	公開日: 2024-01-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦,太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000199

小特集★IFLAダブリン大会レポート

「啓発する，関わる，可能にする，つなげる」図書館大会
―IFLAダブリン大会―

三浦太郎

３年ぶりのリアル開催

トリニティカレッジは1592年にイギリスのエリザベス１世によって創設された，アイルランド最古の国立大学である。オックスブリッジなどと並び「英語圏最古の７大学」に数えられる。図書館には600万冊が所蔵されている。

1732年に設立されたオールドライブラリーには，中世の装飾写本の傑作「ケルズの書」など多数の貴重資料が所蔵され，ダブリン観光の名所のひとつとされてきた。2019年のパリ・ノートルダム大聖堂の火災を受けて，耐火処理が本格的に検討されるようになり，来年から改修工事が予定されている。床から天井まで書架をしつらえた「ロングルーム」も，少なくとも工事期間中，３年間は閉鎖される見通しである。

ダブリン市内には，他にも歴史的な書物を現代に伝えるところは少なくない。18世紀初頭に建てられたマーシュ図書館はその一例である。蔵書は３万冊と，オールドライブラリーよりも規模は小さいが，創建当時の建築や内装を現代に伝えている[1)]。

▲オールドライブラリー（左）とマーシュ図書館

今年７月26～29日，アイルランドの首都ダブリンで第87回IFLA年次大会が開催された。2019年のアテネ大会以来，本来であれば2020年にこの地での開催が予定されていたところ，コロナ禍の影響で大会中止（ダブリンでの開催は延期）となった。昨年のオンライン開催を経て，３年ぶりのリアル開催である。会期は例年より短縮され，４日間となった。国際会議場（CCD）が主会場となり，開閉会式など九つのセッションは，渡航を見合わせざるを得なかった多くの参加者のため，オンラインのリモート参加も可能とされた。

アイルランドでは初開催となった。ちなみに隣国イギリスでは，イングランドのロンドン（1948と1950），リバプール（1971），ブライトン（1987）で，またスコットランドのエジンバラ（1961）とグラスゴー（2002）でIFLA大会が開かれている。大会テーマは３年前と同じく，「啓発する，関わる，可能にする，つなげる」である。

コロナ禍の影響から，会場参加者は96の国と地域から1,934人となり，アテネ大会に比べ約半減した。このほかリモート参加者が493人で，約160の公開セッション，48の企業展示，ポスター発表174件（事前登録）が行われた。

日本からは15名（参加者リストの掲載者。リモート参加を含む）である。発表は５件であった。まず，７月23日に開かれた学校図書館分科会主催のプレ会議「デジタル時代の探究モデルに関する学校図書館のグローバル・アクション」で，①岩崎れい氏（京都ノートルダム女子大学）・大平睦美氏（京都産業大学）が，「日本の公立学校図書館における探究型学習」について共同発表した。②また，同じ会議にリモート参加した河西由美子氏（鶴見大学）・登本洋子氏（東京学芸大学）・伊藤史織氏（玉川学園）も「日本の探究学習に関する取り組み」について共同発表した。

会期中は，③27日にアジア・オセアニア地域活動部会の主催する「アジア・オセアニアの図書館協力」（セッション104）で，岩崎氏・野村美佐子氏（特定非営利活動法人支援技術開発機構）が「東アジアの持続可能な図書館協力」について共同発表を行った。また，27～28日に行われたポスター発表でも，④松戸宏予氏（佛教大学）・野口久美子氏（八

洲学園大学）・野口武悟氏（専修大学），⑤角田裕之氏・新沢典子氏・望月貴光氏（いずれも鶴見大学）が，それぞれ共同発表を行った。

発表の多くは英語で行われ，今大会から翻訳ソフトの活用も図られた。各発表要旨は大会ウェブサイトで見ることができる[2)]。

開会式と「日本コーカス」

7月26日午前中にホールで「開会式」（セッション053）が開かれた。キャロライン・コンロイ・ダブリン市長，メアリー・ロビンソン第7代アイルランド大統領らによるあいさつが行われ，幕間には楽団Sin A Deir Síによって，アイルランドの伝統音楽・舞踊が披露された。

バーバラ・リゾンIFLA会長は，この3年間をフラストレーションであったが同時にイノベーションの期間であったと振り返り，「パンデミックにより我々の芯（ハート）を考える好機が得られ，いま再び，グローバルに図書館界が出会う機会が訪れた」と述べた。

▲会議場内部（左）と開会式

夕方には，国や地域ごとに関係者の集まる11のコーカス（地域会議）が行われ，会議室Ecocemで「日本コーカス」（セッション165）も行われた。会議前半にリゾン会長とハロー・ロッヒャー事務局長代理が会議室を訪れ，参加者にあいさつを述べた。IFLAの理事や委員を務める以下の5名から報告があった。

- IFLA理事：井上靖代氏（獨協大学）
- アジア・オセアニア地域部会委員：岩崎氏・野村氏
- 教育研修分科会（SET）委員：角田氏
- 学校図書館分科会（SL）委員：庭井史絵氏（青山学院大学）

このうち井上氏からは，IFLAの組織改編やIFLA事務局の労働環境をめぐる問題，春に行われた次期会長と会計の再選挙に関して報告があった。岩崎氏と野村氏からは，ライブラリーマップ・オブ・ザ・ワールド（LMW）に載せられる各国のSDGsに関する取り組みや，来年9月に日本で開催されるインターネットガバナンスフォーラム（IGF）への関与について，地域部会から検討を求められていることが報告された。角田氏と庭井氏からは「図書館情報学教育ガイドライン」や「学校図書館マニフェスト」の改訂について情報提供があった。会議に参加した日本人関係者は10名であった。

公開セッション

公開セッションは，ホールや大会議室における発表のほか，中小の会議室においてラウンドテーブル形式で行われる場合も少なくなかった。

取り上げられるテーマとしては，SDGsを扱ったものが多く印象に残った。27日の特別セッション「SDGsはあなたの生活をどのように変えるか」（セッション116）に登壇したディビッド・ドナヒュー前国際連合アイルランド常駐代表は，SDGsに掲げられた17の目標に世界各国が取り組んでいる状況を指して，「地球規模で各国が相互に学び合い，協力するというミューチュアルな取り組みは，きわめてユニークな事象であり，今後の人びとのエンパワーメントに資する」旨を述べた。貧困，教育，環境といった地球規模の問題において，誰ひとり取り残されることのない重要性についても指摘している。

また，28日の基調講演「気候，対立，コミュニティ」（セッション151）の中でマイケル・エドソン氏（独立コンサルタント）は，SDGsについて，認知度は高いがアクションは低調であると指摘した上で，「国連の行うものとしてSDGsが捉えられてしまうと，人びとの脳はそれ以上受け付けなくなる。各自でパーソナル・ストーリーを持つことが重要だ」と，個々の関心に引き寄せてSDGsを実践すべきことを説いた。

現在，IFLAではLMWに各国の図書館におけるSDGsの「ストーリー」を載せているが，そうした場で実践例が紹介され，個々の関心を高め，行動へとつながることが肝要だと言える。

講演・研究発表のほか，27日夜には全体の公式イベント「文化の夕べ」（セッション173）が開催された。2015年にダブリン近郊のダン・レアリーに新設されたレキシコン公共図書館・文化センター

▲文化の夕べの会場

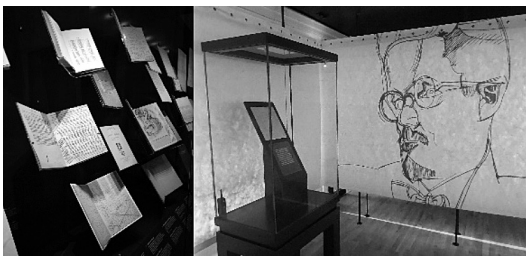
に場所を移して行われ，参加者は（普段は利用者が資料を閲覧する）閲覧席に配された飲食を手に取り，同館内を自由に見学していた。屋内外に設置されたステージ上の音楽演奏なども楽しんだ。

28日夕方には「閉会式」（セッション158）が行われた。リゾン会長は，ロックダウン後の世界において，持続可能な組織として図書館が生き残るために，マインドセットを変えることが重要だと述べた上で，われわれは常に「希望の囚人」（prisoners of hope）たるべきと主張した。

各種表彰も行われ，公共図書館賞には米国のモンタナ州ミズーラ公共図書館が選ばれた。また，グリーンライブラリー賞がシンガポール国立図書館とフランス・パリのメディアテークに贈られるなどした。春に逝去したドナ・シーダー元会長（2015-17）への黙とうも捧げられた。

７月29日には，市内や近郊都市の図書館などを訪れる「ライブラリー・ビジット」（要事前申込）が実施された。著者も，博物館や地元の公立図書館をいくつか回ることができた。

８月会員総会



▲アイルランド文学博物館（ジョイス展）

例年，会期中に会員総会も行われてきたが，今年は事前に参加者の少なくなることを見越し，８月25日にオランダ王立図書館で実施された。オンライン併催で進められた。これについても簡単に紹介しておきたい。

日図協を含む76機関の出席により総会は成立した。2021年度の収支は，収入135.6万ユーロに対し，支出96.4万ユーロと，約39.2万ユーロの黒字と発表された。

３年ごとに行われる会費見直しには，３割の反対票が投じられたものの可決された。ロシアによるウクライナ侵攻の影響などから，ヨーロッパでは物価上昇が顕著であるが，オランダのインフレペースに合わせ，2023-25年に年２％を上限として会費の値上げがなされる見込みである。

また，会員から，戦争や紛争に対応するためIFLAとして価値観を示すべきとの動議が出されていたが，今後，理事会において組織としての透明性や説明責任に関して議論していく旨，文言修正の上で可決された。

今年春から休職中の事務局長ゲラルド・ライトナー氏の休職理由や，次期会長等の再選挙の行われた理由について，参加者から質問も出たが，リゾン会長から明確な回答は示されなかった（その後10月末に，ライトナー氏と年内で契約を終了することが発表された）。

最後に，次回のIFLA大会は2023年８月21～25日にオランダ・ロッテルダムで開催される予定である。今年の大会参加に際しては，日本への帰国時に72時間以内のPCR陰性証明書の提出が必要とされるなど，参加のハードルもあった。そうした制限は現在緩和されているが，コロナ禍の終息を願いたい。

IFLA分科会等の関係者をはじめ，国立国会図書館をはじめとする現場の図書館員の方々，大学教員や研究者，大学院生など，皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

注

1）須永和之「18世紀アイルランドの図書館：マーシュ図書館とリネン・ホール図書館」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』2(1)，1997，p.21-34．なお，アイルランドの図書館の展開過程については，藤野寛之「アイルランドにおける図書館の歴史的変遷」『阪南論集．人文自然科学編』52(2)，2017，p.21-36．を参照。

2）IFLA WLIC 2022 Conference Programme［https://2022.ifla.org/conference-programme/］（最終アクセス日2022年９月８日）なお，2022年11月４日，図書館総合展でフォーラム「図書館界の国際交流：IFLAダブリン大会から見えてくること」が開かれた。

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC10：010.6　BSH：国際図書館連盟］